

# マールウ作品における『君主論』の影響

——タンバレイン、バラバスの造形——

馬場崎 賢 太

(受付 2015年10月30日)

## 序

イタリアのルネサンス期、中世の伝統的な価値観から逸脱し、近代的な思想を生み出した一人にマキアヴェリ (Niccolo Machiavelli) がいる。彼はイタリア統一の悲願から『君主論』 (*Il Principe*) を著し、宗教的倫理観にとらわれず、冷静に現実を見据え、目的を達成する人物を理想の君主と位置づけた。『君主論』の核になる概念は「力」 (*virtù*) と「自由意志」 (*libero arbitrio*) である。中世の世界観の中心である神や運命の支配から逃れ、自由に生きようとする意志と、人間のもつ力によって栄光を勝ち取ろうとする近代的な概念である。彼の主張は国家統一によってもたらされる君主・国民の利益を追求するものだったが、徹底したリアリズムに基づいた彼の政治論は、この時代の人々には受け入れ難きものだった。『君主論』は当時の宗教界を騒然とさせ、1559年には、ローマ教皇庁は『君主論』を禁書とし、また、イングランドのカンタベリー大主教はマキアヴェリを激しく糾弾した。彼の言葉は信仰の否定と誤解され、マキアヴェリの名前は悪のイメージを付与されて広まることになる。

マキアヴェリという人物像に誤解を引き起こしたのはフランス人ジャンティエ (Innocent Gentillet) の著作『反マキアヴェリ論』 (*Contre-Machiavelli*) による『君主論』への厳しい非難だった。これによって、マキアヴェリの真意は無視され、マキアヴェリズムとは「目的のためには手段を選ばない」という悪魔的な権謀術数主義という俗説が流布することになった。『反マキアヴェリ論』は、ラテン語訳、ドイツ語訳、英語訳、オランダ語訳などが20種類以上も出版され、マキアヴェリの名前は反感と嫌悪感をともなってヨーロッパ中に広がった。イギリスで、『君主論』の英訳が出版されたのは1640年のことであるが、そのタイトルページには ‘with some animadversions noting and taxing his errors’ という記述が付されており、イギリスでも彼の主張が否定的に理解されていたことが理解できる。

イギリスのエリザベス朝時代、悪の化身として伝わったマキアヴェリの名前は、演劇の中にも大いに利用された。誤解され、歪曲されたマキアヴェリ思想は、「目的のためには手段を選ばない」悪役を生み出すことになる。そんな中、本来マキアヴェリが意図した近代的

な思想を演劇の中に取り入れた人物の一人がクリストファー・マーロウである。マーロウは、神を頂点とする整然としたヒエラルキーに則った中世的な価値観が深く根付いている演劇の伝統の中に、近代的なリアリズムの視点を注ぎこんだのだった。彼の作品の中には、中世的な価値観と近代的な価値観とが混在し、矛盾・葛藤を提示する。

本論文では、マキアヴェリの著作『君主論』に着目し、マキアヴェリの近代的思想がマーロウの作品に与えた影響を考察する。特に、『マルタ島のユダヤ人』(*The Jew of Malta*)のバラバス、『タンバレイン大王』(*Tambalain the Great*)のタンバレインの、2人の劇中人物の造形に『君主論』が大きく影響を与えていることを検証し、中世と近代の狭間に位置するエリザベス朝演劇の世界観の転換を考察したい。

本研究にとって有意義な先行研究を概観すると、Meyer の *Machiavelli and the Elizabethan Drama*、Boyer の *The Villain As Hero in Elizabethan Drama*、Kirschbaum の *The Plays of Christopher Marlowe*、John Roe の *Shakespeare and Machiavelli* などが挙げられる。Meyer はバラバスを「真のマキアヴェリアン」(‘a true Machiavel’) と位置づけ、テキストからの詳細な引用を用いて演劇上のマキアヴェリアンを定義づけてあることに大きな意義があり、本研究でのバラバスの検証には彼の定義づけを踏襲している。また Boyer は、誤解されたマキアヴェリズムの分析が論の中心であるものの、タンバレインに関して「バラバスのように悪党ではないが一種のマキアヴェリアンである」と、バラバスとタンバレインのマキアヴェリズムの違いを考察している。本来のマキアヴェリの主張に関する分析としては Kirschbaum や Roe の論考を参考とした。

## 1. 『タンバレイン大王』とマキアヴェリズム

エリザベス朝の文学作品の中にマキアヴェリに関する言及が395箇所にもわたって認められる。(Meyer xi) しかし、その多くは『君主論』に示された思想を直接指しているわけではなく、「目的のためには手段を選ばない」という誤解され歪曲された思想を指していると考えられる。

誤解に満ちたマキアヴェリの主張が英国に伝わると、演劇の中でその流行を取り入れようとする動きが出始める。トマス・キッド (Thomas Kyd) の『スペインの悲劇』(*The Spanish Tragedy*) に登場するロレンゾ (Lorenzo) を始めとして、マキアヴェリアンという型の悪役が次々に創造され、舞台上で活躍する。

しかし、マーロウは例外的にマキアヴェリの思想を正しく理解し、『君主論』に大きな影響を受けた劇作家であった。

He was the “notable exception” among the Elizabethan dramatists; for he had studied Machiavelli with a vengeance: and it may be stated as an absolute certainty, that had the “Principe” never been written, his three great heroes would not have been drawn with such gigantic strokes. (Meyer 33–34)

マーロウがマキアヴェリの主張を正しく理解していたことが最も顕著に表れている作品は『タンバレイン大王』(*Tamburlaine the Great*)である。しかし、『タンバレイン大王』を書き終えた数年後、マーロウは、誤解と偏見に満ちたマキアヴェリズムの権化とも言うべきバラバスが悪の限りをつくす『マルタ島のユダヤ人』(*The Jew of Malta*)を執筆する。本来のマキアヴェリズムと俗説ともいうべき誤解されたマキアヴェリズムの描き分けはエリザベス朝演劇の中でどのように機能したのだろうか。

『君主論』第18章の、理想的な君主を「ライオン」と「キツネ」の比喻で表現する一説は『君主論』の中核をなす概念である。マーロウが描く英雄的君主、タンバレインには、マキアヴェリの思想の影響がみられる。

You must then know, there are two kinds of combating or fighting; the one by right of the laws, the other by force. That first way is proper to men, the other is also common to beasts: [...] A Prince then being necessitated to know how to make use of that part belong to a beast, ought to serve himself of the conditions of the Fox and the Lion; for the Lion cannot keep himself from snares, nor the Fox defend himself against the Wolves. (*The Prince*, Chapter XVIII)

MYCETES. [...] that Tamburlaine,  
That, like a fox in midst of harvest time,  
Doth play upon my flocks of passengers, (*I Tamburlaine*, 1.1.30–32)

TECHELLES. As princely lions when they rouse themselves,  
Stretching their paws and threat'ning herds of beasts,  
So in his armour looketh Tamburlaine. (*I Tamburlaine*, 1.3.52–54)

タンバレインは、マイシティーズ (Mycetes) からは「キツネ」に、テチェリース (Techelles) からは「ライオン」にたとえられる。後に『マルタ島のユダヤ人』のプロローグ役としてマキアヴェリの亡霊 (Machevill) を登場させるほどにマーロウがマキアヴェリという人物に関心をよせていたことを考えれば、マーロウは『君主論』を意識してこのたとえを用いたと推測できる。

また、『君主論』でマキアヴェリが強調するのは「運命」(Fortuna) を覆すほどの「力」

(virtù) である。神のさだめた運命によって君主になるべき人物は決まっているという中世的な概念を否定し、個人の力量と意志で運命さえも支配下においてしまう新しい君主が望ましいとマキアヴェリは考えていた。

I think it may be true, that Fortune is the mistrisse of one halfe of our actions; but yet that she lets us have rule of the other half, or little lesse. (The Prince, Chapter XXV)

TAMBURLAINE. I hold the Fates bound fast in iron chains  
And with my hand turn Fortune's wheel about,  
And sooner shall the sun fall from his sphere  
Than Tamburlaine be slain or overcome. (I Tamburlaine, 1.2.174-177)

タンバレインは、運命を否定し、自由で強靱な意志こそが行動を正当化するという考えを体現する人物であり、中世的な価値観から逸脱した英雄として描かれている。

I say, that in Principalities wholly new, where there is a new Prince, there is more and lesse difficulty in maintaining them, as the vertue [virtu] of their Conquerour is greater or lesser. And because this successe, to become a Prince of a private man, presupposes either vertue, or fortune; mee thinks the one and other of these two things in part should mitigate many difficulties; however he that hath lesse stood upon fortune, hath maintain'd himselfe the better. (The Prince, Chapter VI)

TAMBURLAINE. Deserve these titles I endow you with  
By valour and by magnanimity.  
Your births shall be no blemish to your fame,  
For virtue is the fount whence honour springs,  
And they are worthy she investeth kings. (I Tamburlaine, 4.4.124-128)

タンバレインのこの台詞は、臣下の3人の武将を、自らの属国となった国の国王に任命するときのものである。彼の言う 'virtue' は、キリスト教的な「美德」ではなく、「力、能力」という意味で使っており、マキアヴェリの言う 'virtù' に当たる言葉である。(Cunningham 192) このように、マロウは、中世的、あるいはキリスト教的な倫理観を超越し、自らの強靱な意志と力をふるって目的に向かって邁進する主人公を『タンバレイン大王』の中で描いたのである。

## 2. 『マルタ島のユダヤ人』とマキアヴェリズム

『タンバレイン大王』で中世的な倫理観を超越した英雄を描いた Marlowe が後に書いた『マルタ島のユダヤ人』では、対照的に、「目的のためには手段を選ばない」悪役バラバスが登場する。次にバラバスの造形における近代的要素を考察する。

バラバスの最初の独白は、彼を取り囲む金貨と相俟って劇の状況を提示する。「無限の財宝 (infinite riches)」(1.1.37) を求めるバラバスは貪欲という悪徳を象徴するかのような人物である。

近代政治思想であるマキアヴェリズムは、近代初期資本主義の発展と関連して考察することが可能である。ルネサンス期のヨーロッパでは近代初期資本主義の潮流が大規模に展開していた。イングランド人は血縁や封建的つながりよりも富を重視するようになり、その結果、私有財産の保証が他のヨーロッパ諸国よりも確立されるようになっていった。(Macfarlane ch. 7) そしてそれは自らの力量によって自由に富を獲得することができるという個人主義を発展させ、新興市民階級ブルジョワジーの台頭へとつながっていく。(モートン 191) 血筋や家柄による財産の所有ではなく、自己の力量によって富を増やしてこうとするバラバスは、近代的な個人主義の姿勢をもつ人物である。

マーロウが、典型的な悪役の造形にユダヤ人という設定を用いたのはなぜだろうか。

英国では1290年にユダヤ人の国外追放令が出され、そのときから1656年までの間、英国内ではキリスト教徒に改宗したほんの数百人のユダヤ人しか定住を許されていなかった。当時の観客にしてみれば、完全な「他者」であるユダヤ人に否定的なイメージを膨らませる一方だったはずである。そんな時代において、ユダヤ人が演劇の中で悪徳を象徴する人物として用いられたことは想像に難くない。36回に及ぶ『マルタ島のユダヤ人』の上演記録 (Foaks 16-26, 34-37, 47) は、当時の人々のユダヤ人への関心の高さの表れだったとも言える。また、エリザベス女王の侍医であったユダヤ系医師 Lopez が女王毒殺の嫌疑をかけられ、処刑されるという悪名高い事件が起きた1594年にこの劇は人気が再燃している。

マーロウは、ユダヤ人の悪役を登場させた上で、マキアヴェリズムの要素を劇全体に与えている。この劇のプロローグではマキアヴェリの亡霊が舞台に現れ、バラバスをマキアヴェリアンとして紹介する。

MACHEVILL. But wither am I bound, I come not, I,

To read a lecture here in Britaine,  
But to present the tragedy of a Jew,  
Who smiles to see how full his bags are crammed,  
Which money was not got without my means.  
I crave but this, grace him as he deserves,  
And let him not be entertained the worse  
Because he favours me.

(Prologue, 28-35)

ここで登場するマキアヴェリは、悪の化身と歪曲化された、ジャンティエの言うマキアヴェリ像に基づいている。マーロウは、これから登場するユダヤ人は「目的のために手段を選ばない」悪党であることをあらかじめ宣言している。

バラバスの人物造形の根底にあるマキアヴェリ流のリアリズムは、中世的な価値観、世界観に疑問を投げかける役割を果たしている。

BARABAS. Will you then steal my goods?

Is theft the ground of your religion?

FERNEZE. No, Jew, we take particularly thine

To save the ruin of a multitude:

And better one want for a common good,

Than many perish for a private man:

Yet Barabas we will not banish thee,

But here in Malta, where thou got'st thy wealth,

Live still; and if thou canst, get more.

BARABAS. Christians: what, or how can I multiply?

Of nought is nothing made.

1 NIGHT. From nought at frist thou cam'st to little wealth,

From little unto more, from more to most:

If your first curse fall heavy on thy head,

And make thee poor and scorned of all the world,

'Tis not our fault, but thy inherent sin.

BARABAS. What? Bring you scripture to confirm your wrongs?

Preach me not out of my possessions.

(1.2.95-112)

ユダヤ人から財産を没収しようとするマルタ島のキリスト教徒たちは、バラバスたちが犠牲となることの根拠として、苦し紛れにユダヤ人の生来の罪 (thy inherent sin) に言及するが、彼らがバラバスたちの財産を必要としているのは単に政治的理由に過ぎない。それどころか、2幕2場で、スペインがマルタ島の味方をしてくれると分かるや否や、バラバスたち

から没収した財産はトルコに納めないことにまでしてしまう。マーロウはファーニーズたちを観客の共感を抱かせるようには描いていない。中世的・一義的な価値観に揺さぶりをかけられた観客は共感のゆだね場所を失ってしまう。

ファーニーズらの言動は、伝統的な価値観をもつ観客の共感の対象とはなりえないものである一方、彼らの言動には、マキアヴェリの思想と通じるものがある。

この場のファーニーズは、『君主論』第18章における「宗教の政治的有効性」を述べた箇所、つまり、必要なときは信仰心を擬装し、信義に反する行動をとる必要もあるという主張に一致する。

そして、最終場面でのファーニーズの行動もまた『君主論』の主張と合致するものと考えられる。ファーニーズは、バラバスの策略の共犯となることを約束しながら、心に秘めたバラバスを陥れる。マルタ島の総督の地位を再び手に入れるためにバラバスを騙して「策」を弄するファーニーズは、マキアヴェリ的であると言える。

Barabas represents the sensuous, flamboyant Machiavel figure, appealing to the crowd with his studied villainy; whereas Ferneze the Governor, depicts the cooler, more prudent, dramatically far less charismatic type of Machiavellian, closer to the prototype developed in *Il Principe*. (Roe 72)

自己の利益のために悪の限りを尽くすバラバスが、当時の誤解に基づいた、ジャンティエの言うマキアヴェリアンであるとすれば、マルタ島の政権を手にするために画策するファーニーズはマキアヴェリが本来意図したマキアヴェリアンに近いと言える。マーロウは、『マルタ島のユダヤ人』という一つの劇の中にマキアヴェリズムの本当の姿と誤解された姿を同時に描き、ジャンティエの歪曲化されたマキアヴェリズムを敗北させる。

Marlowe は、悪の権化として一人歩きを始めた俗説のマキアヴェリズムを「悪」の造形に利用し、バラバスを生み出した。そこには、エリザベス朝当時のマキアヴェリの思想に対する反感を考慮した、マーロウの政治的配慮が見られる。

1633年に四つ折本として出版された『マルタ島のユダヤ人』の献辞には、出版以前にトマス・ヘイウッド (Thomas Heywood) の演出によって宮廷とコック・ピット座でこの劇が上演されたことが記されている。宮廷での上演の際にヘイウッドは以下のプロローグを書き加えている。

[...] we pursue



The story of a rich and famous Jew  
Who lived in Malta: you shall find him still,  
In all his projects, a sound Machiavelli;  
And all that's his character: he that hath past  
So many censures, is now come at last  
To have your princely ears, grace you him; then  
You crown the action, and renown the pen.

(*The Prologue Spoken at Court*, 5-12)

『マルタ島のユダヤ人』を宮廷で上演する際には、あらかじめマキアヴェリを悪人と宣言することが必要だったと考えられる。ヘイウッドは、自分たちがマキアヴェリの支持者ではないことを明言し、政治的見地から上演に非難が加えられるのを回避している。

『タンバレイン大王』でマキアヴェリが本来理想としていた君主像を描いたマーロウが、『マルタ島のユダヤ人』で歪曲化されたマキアヴェリアンを造形したのも、そのような政治的配慮があったと考えられる。悪の権化として一人歩きを始めたマキアヴェリの名前を劇中に取り上げるには、その者を悪人として描かなければ危険な時代だったのである。

## 結

『タンバレイン大王』の中でマキアヴェリの主張を正しく描いたマーロウはマキアヴェリの近代的な思想に関心を持ち、共感していた。マーロウは、『君主論』の中で描かれる理想的な君主像をタンバレインに投影させ、近代的な英雄タンバレインを舞台に登場させた。しかしエリザベス朝当時の英国では、マキアヴェリの名前には、彼の本来の思想を離れた、悪魔主義者という偏見が第一に付き纏っており、マキアヴェリの名前を舞台上で使用するためには、その人物は悪でなければならなかった。マキアヴェリの肯定は宗教の否定であり、それはすなわち体制への非難と受け取られる時代だったのである。そこでマーロウは悪役の伝統を利用し、「ユダヤ人の守銭奴」という典型的な悪役を登場させ、この絶対的な「悪人」がキリスト教徒によって罰せられ、地獄を思わせる大釜の中で焼け死ぬという構図を作りあげ、政治的な非難を受けることを避けたのだろう。しかしながら、バラバスがもつリアリズムの視線は、伝統的な世界観を揺さぶり、宗教的倫理観にもとづいた中世的な価値観に疑問を投げかける。そのリアリズムに、我々はイギリスの演劇の中の近代性の萌芽をみることができるだろう。



本文の引用は以下のテキストに拠る

Dawson, A. B. (ed.), *Tamburlaine Parts One and Two*, (New Mermaids), London: A & C Black, 1971, 2005  
Siemon, James R. (ed.), *The Jew of Malta* (New Mermaids), London: A & C Black, 1966, 2002  
また、*The Prince* の引用は Dacres, Edward, trans., *Machiavelli, The Prince* (1640), Henry, W. E. (ed.), *The Tudor Translations* Vol. 39, New York: AMS Press, 1967に拠る。

#### 参 考 文 献

Bakeless, John, *The Tragical History of Christopher Marlowe* Vol. 1, Hamden: Archon Books, 1964  
Bawcutt, N. W. (ed.), *The Jew of Malta* (The Revels plays), Manchester U. P., 1978  
Bevington, David, *The Jew of Malta* (Revels Student Editions), Manchester U. P., 1997  
Boyer, C. Valentine, *The Villain As Hero in Elizabethan Tragedy*, New York: Russel & Russel, 1964  
Cole, Douglas, *Suffering and Evil in the Plays of Christopher Marlowe*, New York: Godian Press, 1972  
Cunningham, J. S. (ed.), *Tamburlaine* (The Revels Plays), Manchester U. P., 1981, 1999  
Foaks, R. A., ed. *Henslowe's Diary* 2nd ed. Cambridge: Cambridge U. P., 2002  
Kirschbaum, Leo (ed.), *The Plays of Christopher Marlowe*, The World Publishing Co. (Meridian Books), 1962  
Macfarlane, Alan, *The Origins of English Individualism*, Oxford: Basil Blackwell, 1978  
Meyer, Edward, *Machiavelli and the Elizabethan Drama*, New York: Weimar, 1897  
Roe, John, *Shakespeare and Machiavelli*, Cambridge: D. S. Brewer, 2002  
Sanders, Wilbur, *The Dramatist and the Received Idea: Studies in the Plays of Marlowe and Shakespeare*, Cambridge U. P., 1968  
Romany, Frank & Lindsey, Robert (ed.), *Christopher Marlowe, The Complete Plays* (Penguin Books), London: Penguin Group, 2003  
モートン, A. L. 『イングランド人民の歴史』 鈴木 亮・荒川邦彦・浜林正夫訳, 東京: 未来社, 1980

SUMMARY

The Impact of *Il Principe* on Christopher Marlowe:  
Analysis of Tamburlaine and Barabas

Kenta Babasaki

The purpose of this study is to examine the impact of *Il Principe* by Niccolo Machiavelli on Christopher Marlowe's *Tamburlaine the Great* and *The Jew of Malta*. In the Elizabethan era, many villains called Machiavellians appeared on the stages, though most of them were not exactly based on Machiavelli's *Il Principe*.

Although both Tamburlaine and Barabas are Machiavellians, they are contrastive; one is the hero and the other is the villain in each drama. Tamburlaine is the perfect embodiment of "virtù" and "libero arbitrio", which are the core concepts in *Il Principe* and Barabas is depicted as the embodiment of evil.

Barabas plays the roles to unveil the hypocrisy of the Christians in the drama with viewpoints of the realism or Machiavellism, and to show us the individualism in the early modern capitalism.